

# 平成 2 2 年度病虫害発生予報第 7 号

平成 2 2 年 8 月 2 7 日  
鳥取県病虫害防除所

## 予報の概要

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病(穂いもち)	平年並	やや少ない
		紋枯病	-	平年並
		トビイロウンカ	-	平年並
	ダイズ	斑点米カメムシ類	-	多い
		紫斑病	平年並	平年並
		ハスモンヨトウ	平年並	やや多い
果樹	ナシ	カメムシ類	-	多い
		シンクイムシ類	平年並	やや多い
	共通	カメムシ類	-	多い
野菜	キャベツ、ロケット、仔ゴ	ハスモンヨトウ	平年並	やや多い
	ネギ、ナガイモ	シロイチモジヨトウ	平年並	やや多い

## 気象予報(抜粋)

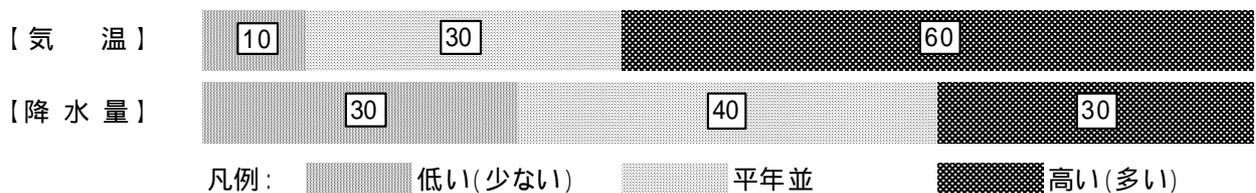
1 か月予報(8月21日~9月20日:8月20日、広島地方気象台発表)

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

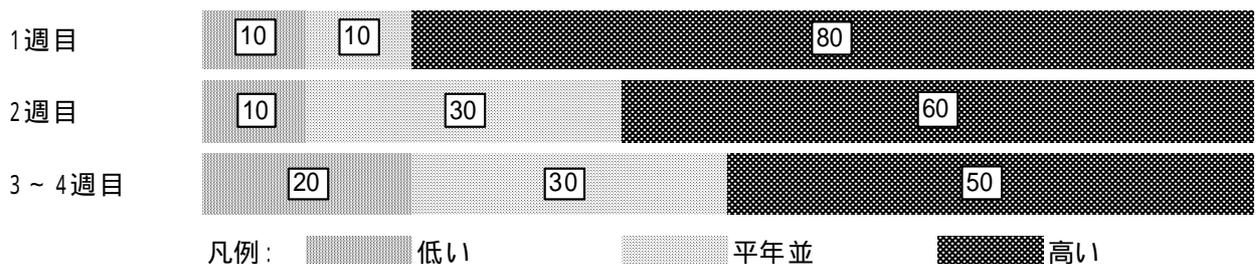
期間の前半は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。期間の後半は天気は数日の周期で変わるでしょう。

週別の気温は、1週目は高い確率80%、2週目は高い確率60%、3~4週目は高い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



## 普通作物

### [イネ]

#### 1 いもち病（穂いもち）

##### (1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	やや少ない

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、葉いもちの発生ほ場率は28.0%（平年：31.7%）で、平年並の発生であった。その後、梅雨明け以降の好天により、一部の中間地～山間地を除き、葉いもちの病勢が停滞し、全体としては上位葉の発病はほとんど認められていない。

イ 穂いもちの感染時期である出穂期以降も高温少雨で経過している。また、向こう1週間の気象予報（8月20日発表）によると、期間の前半は晴れの日が多いと予想されており、穂いもちの発生はやや少ないと見込まれる。

ウ イネの出穂期は平年並である。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 中生品種、遅植えなどで出穂を迎える地域では、出穂前後の防除を徹底する。

イ 降雨が続く場合は、雨の止み間をみて防除を行う。この場合、散布後約3時間経過すれば、降雨の影響は少ない。

#### 2 紋枯病

##### (1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地における発生は、平年に比べてやや少ない。

イ 8月下旬現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における発生は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、気温が高く推移することが予想されており、本病の発生に好適である。

##### (3) 防除上注意すべき事項

残暑などにより病勢進展が衰えず、出穂後の防除が必要な場合には、病害虫防除指針などを参考にして追加防除を行う。

#### 3 トビイロウンカ

##### (1) 予報の内容

発生地域	平坦部（特に沿岸部）
発生量	平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、沿岸部の一部で発生が認められている。

イ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生に好適であると予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 本種の発生は、ほ場間差が大きいいため、各ほ場における生息密度に注意する。特に、ウンカ類常発地において、移植期及び出穂前後の防除を行っていない中生品種栽培ほ場及び遅植えのほ場では、注意が必要である。

イ 防除適期は、幼虫発生最盛期の9月第2～3半旬頃と予想される。要防除水準を超えているほ場（成幼虫数10頭/株）では、病害虫防除指針などを参考にして粉剤などで直ちに防除を行う。なお、散布の際、本種の生息場所である株元に薬剤がかかるように注意する。

ウ 防除にあたっては、収穫前日数に注意し、使用基準を遵守する。

#### 4 斑点米カメムシ類（平成22年7月21日付、病害虫発生予察注意報第5号発表）

##### （1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	多い

##### （2）予報の根拠

ア 8月中旬現在、現地ほ場における発生ほ場率は58.6%（平年：43.2%）、要防除水準（捕虫網50回振りすくい取り虫数が4頭以上）を超えているほ場率は31.0%（平年：21.8%）で、平年に比べて高い。

イ 向こう1か月の気象予報から、引き続きカメムシ類の加害活動及び増殖に好適な条件になると予想される。

##### （3）防除上注意すべき事項

ア 現在、出穂期～穂揃い期を迎えているほ場（中生品種、遅植えなど）では、穂揃い期～乳熟初期の基本防除を徹底する。その後も発生が多い場合には7～10日後に追加防除を行う。

イ ネオニコチノイド系の粒剤を使用する場合は、出穂期～出穂7日後までに湛水散布を行う。なお、大型のカメムシ類に対しては防除効果が劣る。

ウ 要防除水準は、捕虫網50回振りすくい取り調査で4頭以上である。

エ 水田内で穂をつけたヒエ類は、カメムシ類の発生を助長するので直ちに取り除く。

## 〔ダイズ〕

### 1 紫斑病

#### （1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

#### （2）予報の根拠

ア 大豆の開花期は平年並であった。

イ 向こう1か月の気象予報から、本病の発生は平年並と予想される。

#### （3）防除上注意すべき事項

ア 防除に水和剤を用いる場合は、開花期後25～35日に1回、アミスター20フロアブル2,000倍液（100L/10a）又は同剤3,000倍液（150～300L/10a）を散布する。なお、薬液には展着剤を加用する。

イ 防除に粉剤を用いる場合は、マネーグトレボン粉剤DLを開花期後25～30日に1回散布する。

ウ 紫斑病とカメムシ類を同時防除する場合は、カメムシ類の項を参照する。

### 2 ハスモンヨトウ

#### （1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、発生ほ場率は46.7%（平年：38.3%）、1a当たり白変か所数は0.3か所（平年：0.3か所）で、平年並であった。
- イ 7月第1半旬～8月第4半旬までのフェロモントラップへの総誘殺数は平年並であった。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生に好適であると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努め、発生初期の場合、葉の切除などによる捕殺を行うか、病害虫防除指針などを参考にして粉剤、水和剤のスポット散布を行う。
- イ 防除の目安は、1a当たりの白変葉か所数3～5か所以上とする。なお、新葉の出葉により、白変葉が確認されにくいほ場が多いので、観察にあたっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内での観察も行う。
- ウ 若齢幼虫に対する登録農薬の効果は高いが、齢期が進むと防除効果が低下するため、防除適期を逸しないようにする。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、現地ほ場ではホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシの発生がみられ、発生ほ場率は50.0%（平年：40.4%）で、平年並の発生であった。
- イ 5月上旬～8月中旬までの予察灯への総誘殺数は平年並となっている。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、カメムシ類の加害活動及び増殖に好適であると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 近年、9月以降にカメムシ類の密度が急増する傾向がみられるので、今後の発生に十分注意する。
- イ 防除にネオニコチノイド系殺虫剤の水和剤を使用する場合、開花期後30～35日の1回防除を基本とし、紫斑病防除薬剤（アミスター20フロアブル2,000倍）とカメムシ防除剤（ダントツ水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤の2,000倍）の混用液を100L/10a散布する。カメムシ類の発生が多い場合は、初回散布の10日後にネオニコチノイド系以外の水和剤（薬液量：150～300L/10a）、粉剤を散布する。
- ウ 防除にネオニコチノイド系殺虫剤以外の水和剤を使用する場合、開花期後の2回防除を基本とする。1回目は、開花期後25～30日に紫斑病防除薬剤（アミスター20フロアブル3,000倍）と、農薬登録のある水和剤の混用液を150～300L/10a散布する。2回目は、1回目防除の10日後に、水和剤、粉剤を散布する。
- エ 水和剤を使用する場合、薬液には展着剤を加用する。
- オ 防除に粉剤を使う場合、2回防除を基本とする。1回目は開花期後25～30日にマネーグトレボン粉剤DLを散布する。2回目は、1回目防除の10日後に、病害虫防除指針などを参考にして粉剤を散布する。

## 果 樹

### [ ナ シ ]

#### 1 シンクイムシ類

##### (1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 やや多い

##### (2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類成虫の誘殺数は、平年と比較してやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第3世代成虫（第4回成虫）の発生時期は、平年並の8月中下旬～9月中旬頃と予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア ナシヒメシンクイの発生盛期となる8月中下旬～9月中旬の防除を徹底する。

イ 薬剤はアグロスリン水和剤2,000倍液、フェニックス顆粒水和剤4,000倍液などを散布する。なお、薬剤の散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守する。

### [ 共通（ナシ、カキ、リンゴ） ]

#### 1 カメムシ類（平成22年8月5日付、病害虫発生予察警報第1号発表）

##### (1) 予報の内容

発生量 多 い

##### (2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、予察灯等におけるチャバネアオカメムシ、クサギカメムシ及びツヤオアカメムシの誘殺数は平年と比較して多い。

イ 8月中旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町、ゴールド二十世紀、殺虫剤無散布）における無袋果実の被害果率は49.3%（前年：0%）となっている。

ウ 向こう1か月の気象予報から、カメムシ類の加害活動に好適である。

##### (3) 防除上注意すべき事項

平成22年度病害虫発生予察警報第1号（平成22年8月5日発表）を参照。

## 野 菜

### [ キャベツ、ブロッコリー、イチゴ ]

#### 1 ハスモンヨトウ

##### (1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 やや多い

##### (2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場（北栄町）及び現地ブロッコリーほ場におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤の防除効果が高い若齢幼虫期のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、被害がみられた場合には直ちに防除を行う。
- イ キャベツでは、若齢幼虫期にアタプロン乳剤2,000倍液、ノーモルト乳剤2,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合にはトルネードフロアブル2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液、マトリックフロアブル2,000倍液などを散布する。
- ウ ブロッコリーでは、プレオフロアブル1,000倍液、カスケード乳剤4,000倍液などを散布する。
- エ イチゴでは、アタプロン乳剤2,000倍液、トルネードフロアブル2,000倍液などを散布する。

[ネギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、県予察ほ場(北栄町)におけるフェロモントラップ誘殺数は平年と比べてやや多い。
- イ 県予察ほ場及び現地巡回ほ場における、幼虫による食害の発生は平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 幼虫が若齢の時期に防除を行う。これを逃すと防除が困難となる。
- イ ネギでは、プレオフロアブル1,000倍液、トルネードフロアブル1,000倍液、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液などを散布する。
- ウ ナガイモでは、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液を5～7日間隔で2回程度散布する。

## [おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。( <http://www.famic.go.jp/> )

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、  
周辺への飛散には充分注意しましょう。**

### < 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報やフェロモントラップの調査結果(野菜・シバの各種害虫、果樹のシンクイムシ類)、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-0723

E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、9月9日(木)の予定です。